『希望の牧場』

〔著者〕森 絵都
〔絵〕　吉田 尚令

〔発行〕岩崎書店
2014年9月

〔価格〕本体1,500円＋税

## オレ、牛飼いだからさ

前田　侑子
（あきる野市図書館非常勤職員）

あどけない眼をした茶色の小牛と、大地を踏みしめて立つ一人の男性が『希望の牧場』の表紙からこちらを見つめています。本を返して裏表紙を見ると、そこには暗い空の下に点々と広がる無数の牛たちの姿。大きな白と黒の牛が、怖いような顔でじっとこちらを見返しています。

これは、福島第一原子力発電所の警戒区域内で牛を育て続けることを決意した吉沢正巳さんの「希望の牧場・ふくしま」を描いたノンフィクションの絵本です。この牧場は、原子力発電所から北北西にわずか一四キロほどしか離れていない双葉郡浪江町にあります。吉沢さんはそこでおよそ三三〇頭の肉牛を育てていました。しかし、二〇一一年三月一一日、東日本大震災が発生。間もなく原発事故が起こり、放射能があふれ、町からはあっという間に人々がいなくなりました。後に残されたのはもう食べることができず、売ることのできない牛たちばかりです。しかし吉沢さんはこう語ります。「だれもいなくなった町の牧場に、オレはのこった。そりゃ放射能はこわいけど、しょうがない。だってオレ、牛飼いだからな。」五月、二〇キロ圏内にいる牛を殺処分することが国で決定されました。多くの牧場主が泣く泣く牛を殺すことに同意する中、吉沢さんはそれを拒否します。それどころか他の牧場から頼まれた牛をもひきとって育て、その数は三六〇頭にもなりました。繰り返す言葉は同じ、「オレ、牛飼いだからさ。」少しずつ吉沢さんに協力する人が全国から集まるようになり、牧場はいつしか『希望の牧場』と呼ばれるようになります。

一体何が、危険な放射能に身をさらしてまでも牛たちを守ろうと吉沢さんをかりたてているのでしょうか。絵本の中には、一枚だけ原発事故前の福島の風景が描かれた絵があります。さみどりに染まる広々とした田んぼの横には小川があり、子どもたちが三人で魚をとっています。吉沢さんを始めとする福島の人々が本当に守りたかったのはこの景色だったのだろう、ということがこの絵を見るとぐっと胸にせまって来ます。一枚ページ

をめくると、まったく同じ場所であるのにも関わらずぼうぼうとススキが茂り田は荒れ果て、誰の姿もありません。当たり前にあった景色が一瞬で消えてなくなってしまった福島の現実を私たちは突きつけられます。それでも変わらず淡々と、人の住めなくなったこの場所で今まで通り牛を育て続ける吉沢さん。彼は「いつかここに必ず自分たちの当たり前を取り戻すのだ」ということを表現しているように私は感じます。「希望の牧場」という名前の理由を、吉沢さんはあるインタビューの中でこう答えています。「誰もいなくなった絶望の町でも、ここの牛たちだけは元気に生き続けている。それこそが希望なんだ。」二〇一六年一一月現在、多数の仲間を得て「希望の牧場・ふくしま」は非営利一般社団法人として活動を続けています。

この絵本のもうひとつの魅力は、吉田尚令さんによる絵の持つ力と、森絵都さんによるシンプルな語り口の言葉でしょう。大胆なタッチでありながら緻密に描かれた絵が、心の深いところに触れ臨場感を持って目の前に迫って来ます。絵本であるからこそ伝わる、福島の人々の痛いような感情がここにはあります。黙々と牛たちの世話をする吉沢さんの姿がとても静かな抑えたトーンで描かれていることも印象的です。生きものの「いのち」の重みについて、フクシマについて、「正義」について、深く考えさせられます。「絵本は子どものものである」という先入観を捨てて、是非あらゆる世代の方に手にとって体験していただきたい一冊です。

著者の森絵都さんは、以前にもフクシマ二〇キロ圏内でのペットレスキューを取材し、『おいで、一緒に行こう福島原発二〇キロ圏内のペットレスキュー』という本を著しています。警戒区域内に置き去りにされた多くの犬や猫の命を救うため、ぎりぎりのところで活動するボランティアの姿が描かれています。こちらも併せて手にとってみてはいかがでしょうか。

『おいで、一緒に行こう
—福島原発２０キロ圏内の
ペットレスキュー』
〔著者〕森 絵都
〔発行〕文藝春秋　2012年4月
〔価格〕本体1,150円＋税

原発事故後1年ほど経ったころ、牛の毛や体の一部が変色するという現象（突然変異）が見られるようになったそうです。放射能に汚染されているため食用の肉として売ることができません。一円のお金にもならない牛を飼い続けるわけは、「原発事故の生きた証拠である牛たちと放射能との因果関係を研究者に調べてほしいから」と吉沢さんは訴えています。

300頭以上の牛の飼料代は、全国からの募金と絵本の売り上げの一部で賄われています。

◆財政研究会リポート◆ 第33回学習会　2016年11月5日

# 平成27年度決算に見る多摩地域の財政状況（多摩市・国立市）について

報告者　新国 信（にっくにまこと）（多摩市）
下平孟功（しもだいらたけのり）（国立市）
文　伊藤 栄一（いとう えいいち）

今回は、平成二七年度の決算状況について、多摩市と国立市からの報告をいただきました。

## 多摩市の財政 ニュータウンの今

最初に、新国氏から、多摩市企画政策部財政課作成の「平成二七年度多摩市の財政状況（概況）」に基づいて、報告がありました。

多摩市は、多摩ニュータウンの開発とともに発展し、人口の急増とともに市税収入も伸び、市民サービスの充実や公共施設の建設を実施してきました。

しかし、昭和四六（一九七一）年の初期入居から四五年を経過し、成熟期に入って、財政は厳しい運営を迫られていると言います。

平成二七年度決算は、歳入について、市税は地方法人税（国税：交付税財源に全額充当）創設に伴い、法人市民税が減額になったこと等から微減でした。一方、地方消費税が「八%が通年化」したこと等で、地方譲与税等が約一五億円増となりました。

その他、小学校の建て替え工事等に伴う市債の増加約一四億円、過去に廃校となった学校用地の売却益の一般会計繰入約八億円などで、平成二七年度歳入総額は約五六一億円、対前年度比約四一億円の大幅増となりました。

歳出では、第二小学校の建て替え工事、諏訪中の大規模改修等で普通建設事業費が大幅増で、目的別歳出の教育費は約八七億円、前年度比約二三億円の増となりました。

また民生費も、平成二五（二〇一三）年度以降、毎年約一〇億円超増加しており、平成二七年度は約二五三億円と、歳出総額約五四五億円の半分近くを占めるまで増大しています。

今後の見通しとしては、社会保障費の伸びが見込まれ、扶助費や国保・介護保険特別会計への繰出金の増加が懸念されます。

また施設等の老朽化に伴い、公共施設や都市基盤への改修・整備等に伴う建設事業費の増加が財政硬直化に結び付く恐れが大きくなっています。

一方、市税は少子高齢化の波の中で中長期的には減少する見込みで、多摩市の場合、市税の中でも個人市民税が主体だったのは平成五（一九九三）年度までで、その後、固定資産税・都市計画税が主体となり、平成二七年度決算では個人市民税の約一〇六億円に対し、固定・都市計

画税は約一五〇億円となり、固定・都市計画税の方が約五〇億円上回る状況になっています。

しかし、過去の公共施設等の整備に伴う借金の元利償還費である公債費負担は着実に減少し、平成二七年度は約二一億円でしたが、これは市民一人当りに割り戻すと一四，〇三七円で、多摩二六市平均の二〇，二一六円より大分少なくなっています。

多摩市の地方債残高は約一六〇億円ですが、積立金は約一三一億円あり、昭和六二（一九八七）年度からずっと交付税の不交付団体、いわゆる富裕団体で推移してきましたが、以上の状況から多摩市は決して楽観できる状況ではないと話を結ばれました。

多摩市は、六五歳以上の高齢化率が二五・四％（平成二七年一月一日）まで進み、市自体の老朽化も同様で多摩ニュータウンやまちのシンボル、パルテノン多摩、図書館本館、市庁舎の建て替え等も課題です。

報告後の話の中で、多摩市のニュータウンに関連して、一般的にニュータウンを作るときは行政が都市計画で構想を練って作るが、できてしまえば後はそのまま、災害が起きた時もほとんど作った側は責任を感じることもなく、そのまま。最初に行政が都市計画でニュータウンを作ったなら、最後まで面倒を見るべきだと、仙台市に隣接した旧泉市（現泉区）を例に議論がありました。

## 国立市の財政 見逃せない投資的経費

続いて、下平氏から国立市の「平成二七年度決算概況」を基に報告がありました。

国立市の平成二七年度決算も、多摩市と似通った状況ですが、過去最大の決算額で、歳入は約三一一億円と前年度比で七・九％増大しました。歳入規模は五年前の平成二三（二〇一一）年度の約二五九億円から、この五年間で二〇％以上拡大したことになります。

しかし、市税はこの五年間ほぼ横ばいで、平成二七年度は約一四六億円程度。

ただ、市税の徴収率は全体で九九・三％にのぼり、そのうち滞納分を見ると五六・〇％と驚異的な率を示しています。

（市税の滞納に陥るのは、善意で考えれば普通は何かの事情で払いたくても払えない状況が生じてなるもの…、単年度で滞納の収納率が六割近いなどということは信じられません。）

歳入規模が過去最大にふくらんだ要因は、対前年度比で地方債が約二〇億円増、消費税交付金が約七億円増加等でした。

地方債は前年度の三倍超の約二九億円と急増しましたが、これは都市計画道路延伸のための用地買収、国立駅南口整備関係の用地買収（土地開発公社から取得）、整備等のための起債と思われます。

歳出では、性質別にみると、義務的経費の歳出全体に占める割合が平成二三（二〇一一）年度の五三％から低下傾向にあるのが目立ちます。平成二七年度は四六・八％まで下がりました。中でも対前年度比で、平成二七年度は人件費△〇・七％の約四八億円、公債費は△九・五％の約一四億円とマイナスでした。

しかし、義務的経費の扶助費については毎年着実に増大し、平成二七年度は対前年度比三・五％増の約八一億円でした。

国立市の場合、民生費のうち社会福祉費は、多摩二六市中、人口一人当り額が最も高い額であることが特徴で、障害者、特に重度の障害者が多く、国立に三駅あるＪＲの駅ホームにはストレッチャーが入るエレベーターが作られるなど手厚い財政措置がなされてきました。しかし、平成二七年度を見ると、対前年度比で社会福祉費は老人福祉費とともに横ばいでした。

増えたのは児童福祉費と生活保護費で

した。

他方、投資的経費を見ますと、平成二三（二〇一一）年度から三年間、歳出総額に占める割合が六～八％台で推移してきましたが、平成二六・二七年度は二ケタ台に増加し、平成二七年度は歳出総額の一五・八％、約四八億円に倍増しています。

投資的経費が大きくふくらんだのは、国立駅周辺整備事業（総事業費一三九億円）に関係して南口に旧国立駅舎復元等を含み、複合施設を建設するための用地（約一六億円）や国立駅南第一駐輪場用地・道路用地（約十二億円）の買収費や学校の耐震化工事のためです。

性質別のその他の経費を見ますと、平成二七年度、物件費は約三七億円でその六四％が委託料です。国立市では四園の公立保育園を民営化しようとか、公民館と図書館を統合しようという動きがあり、この動きが強まれば物件費は今後も増大する見込みです。

操出金は約三九億円ですが、国立市の財政運営を厳しくしている要因の一つです。これまで下水道会計への操出金が最大だったのですが、平成二七年度は国保会計への操出金がトップに躍り出ました。しかも、国保繰出し約一四億円のうち約一〇億円は赤字補てん分で、これからも増大が予想されています。

なお、下水道会計への操出は、現在、残債が約一〇〇億円まで減り、今後も減少すると予想されています。

また、目的別歳出では投資的経費に係る総務費（一三・九％）と土木費（一四・二％）が、歳出総額に占める割合を増加させ、他方、学校の耐震化工事がほぼ終了した教育費（九・三％）がその比重を下げています。民生費の比重は四五・二％です。

最後に積立金の状況は、このところ目立った取り崩しもなく、平成二三（二〇一一）年度の約三六億円から、平成二七年度には約五四億円に増大し、その内、財調は約一七億円を確保しています。

地方債現在高は、平成二三（二〇一一）年度に約一五〇億円でした。平成二六（二〇一四）年度までは順調に減らして約一三四億円まで減少しましたが、平成二七年度に増やしたため五年前の水準の約一五一億円に戻しています。

なお、地方債残高のうち臨時財政対策債は、この三年間は発行せず、平成二七年度の残高は約四六億円でした。

国立駅南口の様子

## 多摩市と国立市の財政状況を聞いて

両市とも財政状況は比較的豊かで（国立市も平成二八年度は不交付団体）堅実である感じがしましたが、議論の中では国立市が臨時財政対策債を借りないで財政運営をしているのは「もったいない」のではないか、というやり取りもありました。

仙台市では、臨時財政対策債を発行可能額の半分くらいしか借りないことで、経常収支比率を引き上げ職員削減に結びつけていたなどという事例も明かされました。しかし、「いくらお得」と言われても、やはり借金。西東京市のように合併特例債を目一杯借りて、今は後悔している市もある、などと話は続きました。

次回は、開始時刻を午後三時からとし、十二月三日（土）に開催します。報告者は、大和田氏になります。

タマの風 vol.42

# 落ち葉がよく滑る

神子島 健
（かごしま・たけし）

秋の長雨の久々の晴れ間に公園に集まった吾々ネコの雑談から始まるにゃ～。チー子いわく、「今年は雨が多くていややわ～。この季節、雨に濡れると寒いやろ、濡れへんところにどうしてもこもりがちで、運動不足やわ」。

クロスケが「秋の雨で困るのは、アスファルトの上の落ち葉が濡れて、結構滑るんだよね」「ホンマそうやねん。土の上の落ち葉やったら別に滑らんし、アスファルトだけなら爪の引っ掛かりもええんやけどなあ」「そうそう。あと、アスファルトは雨のあと水がたまりやすいから、嫌なんだよね～」

「水がたまるで思い出したにゃ～」と吾輩が話の向きを変える。「九月に福島の相馬の方に行った時にゃのだが、怖いぐらいの土砂降りになってにゃー」「九月も雨多かったしな。ほいで？」「坊主頭が車を運転しておったのだが、雨が強すぎで、見学に行こうとしていたところ（屋外）に行くどころではニャい。仕方なく車の中から相馬の海沿いの地域はどんな感じかと走っていったのだが」「ふむ」「地盤沈下もあるかもしれニャい、もう水がビシャビシャで、車で走るのもおっかニャい。津波でやられたところにゃので、今は人が住んでいニャい。見ると大雨の時は通行止めになると看板が出ていて、こんな人気のないところで一人と一匹、足止めになっては堪らニャいと、大慌てで幹線道路に戻ったのが印象的だったにゃ～」「なんや、オチの無い話やな」「まあ、そうだけども、やはり、というべきか、除染した廃棄物のフレコンバックがダーッと積み上げてあって、余計に印象的だったにゃ」「やっぱりオチは無いんか。よくすべっとる」

チー子の突っ込みは放っておいて続ける。「そのあと、歩行者の入れない浪江駅の周辺に行った時は、地震のダメージがひどくて、それが五年半経ってもそのまま放置してある感じが、被災地を色々見ている吾輩の目から見ても、とても異様な感じだったのだにゃ」「放置してあるゆうんは、つまり原発事故のせいなん？」「その通り」「時間が止まったみたいな感じやろか」「現実には、人が住まなくなった住宅地で草木がボウボウに生えて、野生動物（イノシシ）などが町に降りてきて家を荒らしたりしていて、大変だそうだにゃ（NHKスペシャル『被曝（ひばく）の森～原発事故5年目の記録～』二〇一六年三月六日）」「へー」

「それこそ、人が住んでい

ニャいと、例えば庭に柿の木が植えてあるような時に」「時に？」「普通なら柿がなれば人が採るにゃあ」「そりゃそやな」「ところが、人がいニャいと、熟れた柿が地面に落ちる」「うむ」「その柿を狙って、普通なら人里に降りてこニャいイノシシが、我が物顔で人家の庭にやって来る」「なるほど」「先の番組では、南相馬市の小高区で、一時的に家に戻った人が、孫が生まれたときに植えた柿の木を『しょうがない、切るしかないな。悔しいけど』と切っていた様子が映っていたにゃ～」

「あの辺て、人が戻れる地域が広なったんちゃう？」「そうだね。今年四月に居住制限が解除された地域が結構あるにゃ。小高駅のあたりなんかは、七月一二日から常磐線が再開したにゃ。もっとも、原発近辺の路線はまだ止まっているし、仙台方面（相馬駅～浜吉田駅間）もまだつながっていニャい。そんな状況では当然とも言えるが、鉄道再開の地元へのインパクトはあまり大きくなさそうな話を聞いたにゃ。これが一二月に仙台までつながれば変わるのか、吾輩にはにゃんとも言えぬが…」

「そうか。まだ宮城の南の方は、常磐線つながっていないんだね」とクロスケ。「そうだにゃ～。宮城県の沿岸部の南端（福島との県境）、山元町の方は、線路を内陸側に移す工事をしているのだにゃ。開通に先駆けて、山下駅周辺の再開発（＝海沿いの住宅なども内陸へ移してコンパクト化する）もだいぶ進んでいたようだにゃ。きれいな街ができていた、と、とりあえずは言っておこう」「とりあえずって何なん？　持って回った言い方やん」

「んー。まあ、一般的に言えば、ハードが整備されたからと言って人が戻る保証はニャい。まちづくりにおいてはソフト面も含めて、被災者が心理的に、地元に戻ることに希望を持てるか否かが重要だにゃ。特に避難先での新しい生活が落ち着いていれば、それを変えるリスクをとってまで、町が元の活気を取り戻すかわからない中で地域に帰るか、難しい選択だにゃ」「なかなか難しいんやな～」「今年三月、つまり震災から五年の時点で、山元町の人口は震災前から二六％減、ということだそうだにゃ」と、なんだか、東北の被災地の状況を考えていると、暗い気持ちになってしまったにゃ。ツ

小高駅の改札には、線量計が設置してある。
9月12 日撮影。

ルツル滑るアスファルトの上の落ち葉を歩いて、前に進んでいる感じがしニャいような感覚か。

内陸へ移され、現在整備中の新しい JR 山下駅（12 月の再開予定）の駅前ロータリーと、周辺の新しい市街地。

ちょうど関連する話が、多摩研の事務所でも出ていたにゃ。昔仙台に住んでいた編集長いわく、「やはり、というべきか、五年目の三月にはそれなりに震災関連の報道もありましたが、五年半の今年九月となると、東京では震災の報道がぐっと減りましたね。熊本の様子も、あまり出てきません。現実はまだまだ大変なはずですが」。活舌の悪いジムキョクチョーが、パ行の発音に苦労しながらことばをつなげる。「ピコ太郎のＰＰＡＰのニュースをやっている暇があったら、そういう報道をしてほしいですよね」

坊主頭が割り込む。「九月に東北に行った際、やはり向こうのニュースでは当たり前に震災復興のニュースに時間を割いていましたけど、東京のメディアとのギャップが、本当に大きいですよね」

「そういう意味では、小池都政や築地の問題は、我々都民にとって重要であっても、全国ネットのニュースで長々取り上げるのはどうなのか、という気がします」と編集長。「メディアの中央集権、キー局のテレビ支配という問題ですね」

「逆に言えば、都政の問題をマスメディアは、全国レベルで報道する〝価値〟、ここでは小池さんが出ると視聴率が取れるとかそういうレベルの話ですが、その価値がないと扱わないので、都民は都政の基礎的な問題をキチンと知る機会が限られているわけですよ」とジムキョクチョーが憤る。

「本当に。しかしそれは〝多摩研なにやってるんだ、もっと都政の現状に多摩地域の観点で切り込め〟という話に跳ね返ってきますね、ジムキョクチョー」と、今まで静かに聞いていたノゾミさんが、吾輩をヒザに抱えてなでながら鋭い一言を発すると、お茶を飲もうとしていたジムキョクチョーは、むせてお茶を少し噴き出してしまった。ジムキョクチョーのヒザに乗っていニャくてよかったと思う吾輩であった。

（続く）

ちなみに、豊洲への市場移転については、流通のあり方の変化がもたらす大きな問題点について、「タマの風」（第八回～十回＝二〇一四年一月号、三月号、四月号で言及しています。あまり知られていない観点ですが、重要な問題ですので合わせてどうぞお読みください）

# 12月イベントのご案内

## ◆連続講座 「プルム学校の実践」第3回
## 「生態農業を軸に、地域住民を主体とした地域づくりと、それが可能にした公教育改革」

□日時　2016年12月25日(日)13:30～16:30

□会場　ひの社会教育センター(豊田駅北口徒歩12分・バス停「市立病院入口」)

□参加費・資料代　1,000円 (学生300円)

□講師　尾花 清 氏(大東文化大学名誉教授)

講演は14時から ※講演前後に各30分程度、現地の映像を放映予定です。
http://hsecsup.wixsite.com/poolmoo

## ◆第11回 東京地方自治研究集会

□日時　2016年12月11日(日)9:30～16:30

□会場　明治大学駿河台キャンパス リバティータワー

□参加費　無料

□記念講演　講師:渡辺 治 氏(一橋大学名誉教授)

□プログラム 9:30～ 全体会 ・ 13:00～ 分科会(10分科会)

○第1分科会 中小企業・地域経済　基調講演 「頑張る東京の中小商工業と行政の役割」
八幡一秀 (中央大学教授・多摩住民自治研究所理事長)

①東商連「東京の中小商工業の実態と運動」
②東部共同行動自治体キャラバン「小規模企業等の産業・商工政策」 報告者:宮下武美(足立区労連事務局長)
③仮題「地域経済振興と自治体労働者」品川区職労・世田谷区職労を予定
さらに、東京土建による公契約条例や墨田区の中小企業政策の転換なども報告予定

○第2分科会 いつまでも住み続けられる私たちのまち東京 ○第3分科会 2/3って何ですか！？本当に怖い「緊急事態条項」 ○第3分科会 人間らしい暮らしを求めて ○第5分科会 高齢者・障がい者が住み続けられるまちづくり ○第6分科会 東京の医療、介護・福祉 ○第7分科会 保育・子育て ○第8分科会 放課後のあり方を考える ○第9分科会 子どもの学び・遊び・生活(就学後)・障害児対策 ○第10分科会 自治体民営化の現状と課題―自治体の役割を考える(当研究所理事の杉山氏が報告者です)

大東文化大学経済研究所主催・大東文化大学経済学会後援

## ◆第36回 経済シンポジウム

□日時　2016年12月10日(土)13:00～17:00

□会場　大東文化大学板橋校舎 中央棟多目的ホール

□参加費　無料(事前申込不要・一般の方も歓迎)

□基調講演 「どうなる、どうする『地方創生』」 保母武彦(島根大学名誉教授)

報告 「持続可能な地域づくりの経済学」 花輪宗命(大東文化大学経済学部教授)
「小さくても輝く自治体の財政分析」 大和田一紘(一般社団法人財政デザイン研究所代表理事)
「地域の未来を紡ぐ人を育てる」 三島康雄(NPO法人フォーラム自治研究副理事長)

パネルディスカッション 「本来あるべき『地方創生』の姿」
モデレーター 花輪宗命
パネリスト 保母武彦・大和田一紘・三島康雄・石山雄貴(一般社団法人財政デザイン研究所代表理事)

多摩住民自治研究所理事の大和田一紘氏など、多摩研と関わりの深い方々がご報告をするシンポジウムです。

# ○　多摩研の講座　○

2017年1月～2月

財政分析講座

## ◆よくわかる市町村財政分析基礎講座

自分のまちのデータを基に1から、地方自治の財政の基礎を学んでいきます。

講師　大和田 一紘（多摩住民自治研究所理事）
　　石山 雄貴（多摩住民自治研究所研究員）

日程　2017年1月16日（月）・17日（火）
受講料　27,000円（消費税込）※各種割引あり

## ◆財政分析ステップアップ講座

財政分析基礎講座で学んだことを土台に、更に詳しく実践的な地方自治財政を学びます。

講師　大和田 一紘（多摩住民自治研究所理事）、石山 雄貴（多摩住民自治研究所研究員）
日程　2017年1月27日（金）・28日（土）
受講料　27,000円（消費税込）※各種割引あり

## ◆Excelで学ぶ財政分析〔歳入・歳出編〕

財政分析基礎講座で学んだことを土台にExcelシートを使用した効率的な財政分析の手法を学びます。

講師　石山 雄貴（多摩住民自治研究所研究員）、大和田 一紘（多摩住民自治研究所理事）
日程　2017年2月5日（日）～7日（火）　**3日間**
受講料　29,700円（消費税込）※会員割引あり

会場【上記3つの講座共通】
　　富士電機 能力開発センター　（JR中央線 豊田駅北口 徒歩5分）
宿泊　会場と同じ施設に宿泊できます（朝食付6,200円）。

---

議員の学校

第27回 議員の学校
激震する情勢をつかみ、地域と住民の暮らしに向き合うために

## 「2017年度予算と直面する政策課題」ー 介護・保育・教育 ー

講師　川瀬 光義（京都府立大学教授）、石川 満（元日本福祉大学教授）
　　荒井 文昭（首都大学東京教授）、池上 洋通（自治体問題研究所理事）
日程　2017年2月13日（月）・14日（火）
受講料　28,700円（消費税込）※各種割引あり
会場　たましんRISURUホール（JR中央線 立川駅南口 徒歩13分）
宿泊　ご自身でお手配ください。

編集日誌 ひとこと ふたこと

## 多摩研の魅力と市民の学び

財政研究会の活動がめざましい。隔月に一回、定例会を持ち、毎回、会員が研究成果を発表する。その内容は必ず「緑の風」に掲載される。最近は報告のボリュームが増える傾向にある。前号の財政研リポート「臨時財政対策債と償還費と交付税措置について」は六ページもの「論文」であった。読みごたえがあった。

参加者も増え、遠く仙台市から参加された元議員の方がいた。また、最近では奈良県から参加したい、という問い合わせがあった、という。この方は当研究所の財政分析講座に参加されている。奈良県から参加したいほど、多摩研の研究会に「魅力」を感じていただき、嬉しいかぎりだ。

私は今年の総会で、「都政研究会」を立ち上げると宣言したが、未だにできていない。来年六月には都議会議員選挙がある。いよいよ時間が無くなってきた。そこで、このコーナーを借りて、都政研究会を始めることを改めて宣言すする。

市民が主体的に学び、主権者として行動するとき、「劇場型選挙」は通用しなくなるだろう。

事務局長　近澤 吉晴

## 財政研究会　次回学習会は―

**2016年12月3日（土）**

**15：00～**

場所 ： 多摩住民自治研究所

報告者 :大和田 一紘

**「多摩地域の地方創生**
**～合計特殊出生率」**

※学習会後、忘年会の予定です。
どなたでもご参加いただけます。

### 多摩住民自治研究所 10月の活動

- 3日（月）～4日(火)
  第26回 議員の学校
- 5日(水)『緑の風』編集委員会
- 14日(金)～15日（土）
  よくわかる財政分析基礎講座
- 18日(火)事務局会議
- 27日(木)『緑の風』印刷帳合
- 28日(金)『緑の風』発送
- 29日(土)連続講座「プルム学校の実践」
- 31日(月)～11月1日(火)
  よくわかる財政分析基礎講座


# 改定介護保険法と自治体の役割

新版

**○新総合事業と地域包括ケアシステムへの課題**

**伊藤 周平・日下部 雅喜(著)**

介護保険はどうなっているのか。要支援サービスが介護保険から外され、要介護１・２の保険外しも目論まれている。丸投げされた自治体はどうサービスを継続し、地域包括ケアへとつなげればいいのか。住民のニーズに応える自治体の役割を明らかにする。現状をフォローする新版。

定価(本体1,389円＋税)

自治体問題研究所新刊